



ひ なに 火は何からできているの

ひ 火には、いろいろある

かみ き アルコールやろうそくは、ほのおをあげて燃えますが、すみ あか 炭は赤くなって燃えているだけです。火といっても、かみ き ひ 紙や木の火、アルコールやろうそくの火、ひ せきゆ 石油ストーブの火など、燃えている物によってちがいます。

もの も 物が燃えるときは、もの きたい で、ものがあたためられて きたい 気体になったりしています。ほのおをあげて燃えるのは、その きたい も 気体が燃えているからです。

たとえば、ろうそくが燃えているときは、ろうがあたためられて えきたい 液体となり、ろうそくのしんをのぼっていきます。しんをのぼったろうは、ろうそくの ひ 火によってあたためられて きたい 気体になり、その きたい も 気体がほのおとなって燃えています。

ひ 火ができるには、酸素が必要

ひ は、いろいろなものが、たか おんど はっかてんいじょう 高い温度（発火点以上）になったときに燃え始めます。ところが、たか おんど 高い温度になっただけでは燃えません。ものが燃えるには、さんそ ひつよう 酸素が必要です。ものが燃えているときには、さんそ も 酸素と燃えるものが、たか おんど 高い温度ではたらきあっているのです。

くうきちゅう 空気中には、さんそ やく 酸素が約21パーセントふくまれています。このさんそ も 酸素が、物を燃やすはたらきをしています。それで、もの も つづ 物が燃え続けるためには、あたらしい 空気が必要なんです。

つまり、ひ は、燃えるものとさんそ りょうぼう 酸素の両方があってできます。（監修・小川 格）

